

# 歴史的にコンティンジェントな過程としての場所 —構造化と場所生成の時間地理学—

アラン・プレッド\*  
(西部 均\*\* 訳)

Allan Pred

Place as historically contingent process:  
structuration and the time-geography of becoming places  
*Annals of the Association of American Geographers*, 74(2), 1984, pp. 279-297

本稿は、従来とは異なるタイプの地域地理学あるいは場所中心の地理学のために、理論的基礎を提示するものである。その枠組みは、時間地理学と登場しつつある構造化理論を集約したものにに基づいている。それはまた、景観として眼に映るさまざまな特徴の組み合わせとしてだけでなく、絶えず生成する人間の生産物としても、場所を概念化することで構築される。場所はひとつの過程とみなされ、その過程を介して社会的・文化的諸形態の再生産、おのおのの個人誌の形成、自然の変形がやむことなく相互生成し、同時に時間-空間の種別的な諸活動や権力諸関係が絶え間なく相互生成する。さらに、こうした諸現象が場所や地域の生成過程に織り込まれるときには、普遍的法則にしたがうのではなく、歴史的状況に応じてさまざまなやり方があると強調される。その枠組みからおのずと浮かび上がる三つの経験的論点について、手短かに検討される。

キーワード：時間地理学，構造化，権力関係，社会的再生産，言語，知識

現代地理学は場所の科学的研究である。

—Paul Vidal de la Blache

歴史は人間のプロジェクトの成果を抜きにして理解できるものではない。

—Anthony Giddens

設定された場所と地域は、恣意的に範囲を定められたものではあるけれども、人文地理学研究の根本的要素である。最近まで、場所と地域は、ある恣意的な観察期間にある地区のある計測できる属性や可

視的な属性を重視するという手法で扱われることがほとんどだった。したがって、空間的な分布の諸要素として、自然物や人工物が織りなす独特の集合体として提示されようが、ローカルな特色を与えられた諸形態として提示されようが、いずれにしてもおのおのの場所と地域はほとんど人間活動の凍りついた場面に過ぎないものとして描かれてきた。「新しい人文主義」地理学者たちは、場所を主体にとっての客体として、個人に感じられる価値や意味の中心として、あるいは感情的執着や感得される意義のあ

\* カリフォルニア大学バークレー校地理学科

\*\* 龍谷大学非常勤講師

るロカリティーとしてみなしてきたが、彼らでさえ本質的には場所を自動力のない、経験された場面と考えている<sup>1)</sup>。本稿では場所と地域に対するこれまでとは幾分異なる観点をとる。

目に映る場面として場所を構成する建造物の集合、土地利用パターン、コミュニケーションの動脈が、何もないところから出現し完全に形づくられ、停止し、凝り固まり、かつての自然景観に永久に刻み込まれるようなことはあり得ない。場所の指し示すものが、村落であれ大都市であれ、農業地帯であれ都市-産業コンプレックスであれ、場所というものは常に人間の生産物を表している。別の言い方をすれば、場所は空間と自然の割り当てと変形に常に関与し、それは時間と空間における社会の再生産や変形と分かつことのできない現象なのである<sup>2)</sup>。このように、必ずしも場所は、景観やロカールのうえに、そして活動や社会的相互行為のための舞台背景のうえに、はかなく観察されるものだけではないのである(Giddens 1979, 206-7; Giddens 1981, 39, 45)。それはまた、やむことなく起こるもの、物理的舞台背景の創造と利用を通してある種別的なコンテクストのなかで歴史に対し貢献するものでもある。

出発点としてこのように場所(および地域)を概念化することによって、制度的実践と個人的実践を、それらが織り込まれる構造的特徴と同等に強調する、歴史的にコンティンジェントな過程としての場所の理論を提示しようと思う。当該の理論は、「構造化」の理論と学問分野を越えた時間地理学の言語とを集約したものにに基づいている。それはまた、間接的にヴィダル Vidal 学派の人文地理学 *la géographie humaine* の伝統、つまりローカルな実践的生活を強調し、住民の伝統的な態度、価値観、見解、信念、心理状態に基づく自然環境への創造的適応として生活様式 *genre de vie* を概念化する伝統に、多くのものを負っている<sup>3)</sup>。

場所は、部分的には、ローカルな出来事の途切れることのない流れという観点から概念化されているので<sup>4)</sup>、提起された理論は、その過程に参加する人々の物質的継続性と、時間-空間の種別的な諸実践にかかわるあらゆる自然的物体と人工的物体の物質的継続性とをともに説明に取り込もうと努める。したがって、そこに参加する個人は、彼ら抜きでは過程

としての場所があり得なくなる存在であり、従来型の人文地理学や社会科学によく見られる、物化、断片化、原子化する手法では扱われない。彼らは、ある事例では単に生産者として、別の事例では住民として、また別の事例では一定の年齢集団や人種集団の一員として、さらに別の事例では消費者として、しかしまたさらに別の事例では環境の知覚者として、というようにはみなされない。そのかわりとして、過程参加者は同時に客体でありかつ主体である統合された人間とみなされる。彼らは、社会の仕組みやその構造的諸特性にかかわることで、自らの思考、行為、経験、意味付与が絶えず生成している人々なのである。

歴史的にコンティンジェントな過程としての場所の理論が構造化理論と時間地理学を集約したものにに基づいているので、その提示に当たっては、構造化理論と時間地理学の枠組みの基本と両者の重要な相互連関について、改めて手短かに述べるところから始めなければならない。

### 物質的継続性と構造化過程の時間-空間の流れ

過去 15 年くらいで、個人と社会、実践と構造、行為作用と構造、社会化と社会的再生産のあいだの織り合わされた関係性を考察するヨーロッパの社会理論家や社会哲学者がその数を増し、彼らのあいだで思考が徐々に一点に向かって集中しつつあることが注目される。この学者たちは、たいてい、「構造化」という中断されることのない過程の歴史的に種別的な表現のなかで、その連結されたカテゴリーを互いを弁証法的に再生産し変形するものとして描写する。ギデنز Giddens、ブルデュー Bourdieu、バスカル Bhaskar など、構造化学派の思想家と認められる人たちは、時々、論点とカテゴリーの選択が著しく異なっている。しかしながら、彼らは全て実践と構造を同等に「真」であるとみなし、また人間は構造の機械的な運搬人に過ぎないと考えることを否定する。だいたいにおいて、彼らは次のように要約できるその他の観点をも共有する<sup>5)</sup>。

(1) 与えられたいかなる地区にとっても、社会的再生産は一個の進行する過程であり、それは(家族制度と

結びついたありふれた諸実践を含む) 日常的な制度的諸活動の遂行から切り離せない。より正確に言えば、そのような諸活動の遂行は、結果として、制度それ自体や、諸活動を繰り返したり創り出したりするために必要な知識や(Thrift, 1979 参照), もろもろの既存の構造的関係性を永続させたり修正したりすることになる。

- (2) 社会化を介して、行動の諸規範が吸収され当然視されるようになり、また与えられた社会的コンテクストにふさわしい技能が獲得され強化される。社会化は制度的諸活動に参加することによって発生し、成人期を通して持続する。
- (3) 社会化と社会的再生産の同時的展開において、個人と彼女もしくは彼の意識は社会によって形づくられ、一方社会は個人と彼女もしくは彼の意識によって意図せずにかつ意図的に形づくられる。つまり、社会化と社会的再生産(そして社会の変形)は常に相互生成する。
- (4) 個人と社会の弁証法的な関係性、つまり両者の不断の生成を扱うためには、物質的継続性と、構造化の過程と同じ意味をなす実践と構造の弁証法を本気で扱わなければならない。
- (5) 構造化が展開するとき、あらゆる社会システムの構造的諸特性は日常の諸実践の操作を介して自己表現し、同時に日常の諸実践はその社会システムの構造的諸特性をマイクロとマクロなレベルで産み出し再生産する。

無用な混乱が後の議論を読む際に生じないように、もろもろの「社会的構造」やその用語のもとに包摂されるあらゆる経済的構造や政治的構造の諸特性について、手短かに定義する必要がある。社会的構造は、物質的、象徴的、権威的資源に対する統制を含む、生成力ある諸規範と権力諸関係から構成され、それらは既に組み立てられてある種別的な歴史的・人文地理的な状況を、あるいはある歴史的に地理的に種別的な社会システムを形づくっている。社会的構造に備わる諸規範と権力諸関係は、人間の行為作用と実践に制約や機会を与えるだけではない。それらはまた、人間の行為作用と実践から出現する。ある社会的構造を構成している諸規範は、公式でも非公式でも、明言があってもなくても、記載があってもなくても、明示的でも暗示的でも、どちらでもあり得る。それらの性質が何であれ、このような修得され人間によって生産された諸規範は、特定のコンテクストでの活動と行動の基本となる文法を形成する。

ある社会的構造に備わる権力諸関係は、異質な個人のあいだに、異質な集団や階級のあいだに、異質な制度のあいだに存在するかもしれないし、一方が個人や集団で他方が制度という間柄に存在するかもしれない。それぞれの権力関係にその地理的広がりにおいて差異がある限り、構造化の諸過程は複数の空間のレベルで同時発生し、媒介となる諸制度や個人々々人に関係するさまざまな実践を通じて相互浸透することになる。

ギデンズ、ブルデュー、バスカルや、構造化学派とつながりをもつ人たちは、社会的活動は全て時間-空間における具体的な相互行為の形態をとるという事実に敏感である。「社会システムの構造化は全て、その規模の大小にかかわらず、時間と空間のなかで生じる」(Giddens 1981, 91)。しかし、構造化の視点をもつと認められる人たちの誰も、自己と社会の日常における形成と再生産を、時間と空間における特定の位置で生じる、構造から影響を受け構造に影響を与える種別的な諸実践として表現する手法を、本当には概念化できていない。構造化の提唱者たちは、時間-空間の種別的な与えられたあらゆる実践をどのようにしたら過去の時間-空間の状況に根づかせられるのか、そして同時にどのようにしたら未来の時間-空間の状況を支える潜在的な根として役立て得るのかという論題について緻密ではない。彼らは、時間と空間における特定の文化的、経済的、政治的諸制度の機能遂行と再生産が、いかに時間的・空間的に種別的な行為、知識の構築、特定個人の個人誌と切れ目なく結びついているかを正確に説明できずにいる。さもなければ、彼らは構造化過程の途切れることのない時間-空間の流れを捉えていないのである<sup>9)</sup>。

こうした構造化理論の限界は、思考の主要部分を時間地理学のある要素と集約することによって克服されると、私は他稿で強調してきた(Pred 1981b, 1981d, 1983)。そのような集約は、時間地理学の言語に備わる二つの基本的建設資材である「パス」と「プロジェクト」という概念に基づく。パス概念の考え方によれば、個人の存在を連続的に形成するさまざまな行為と出来事のそれぞれが、時間的特性と空間的特性をとともにもつ。結果的に、ある人の個人誌はさまざまなタイプの制約を受けやすい時間-空

間を通した連続的なパスとして概念化され得る。他の生物、自然現象、人工物の「個人誌」もまた同じ方法で概念化され得る。プロジェクトは意図に突き動かされ目的を志向するあらゆる行動を完遂するのに必要な一体となった一組の務め tasks から構成される。短期間もしくは長期間のプロジェクトにおいて次々と生起する務めのそれぞれは、二人以上の人たちのパスが、あるいはそうした人たちと建造物、家具、機械、原材料のような有形資源のパスが時間と空間のなかで連結することと同じことを意味する。

時間地理学が構造化理論と集約可能となるのは、社会の構成要素となる諸制度のそれぞれが、日常のそしてもっと長期間にわたる、生産や消費や、それらの制度に責任のあるその他のプロジェクトから離れて存在しないと承認されるときである。もし社会の公式・非公式の制度の全てがプロジェクトと結びついたものであり、もし全てのプロジェクトが何らかの人間の参加を必要とするならば、そのとき以下の提議があるだろう。すなわち、構造化の詳細な状況と物質的継続性は、種別的な時間的・空間的位置で発生する個人のパスと制度的プロジェクトの交差として絶えることなく明確に説明される。もしこれ

が事実ならば、歴史的にコンティンジェントな過程としての場所—それは場所の生成であり、人間が作り出した場所の要素の全てであり、与えられた地区に生じる全てのものである—は、場所（群）における構造化過程の日常の展開から切り離せないということになる。

したがって、場所はひとつの過程であり、その過程を介して社会的・文化的諸形態の再生産、おのこの個人誌の形成、自然の変形がやむことなく相互生成し、同時に時間—空間の種別的な諸活動や権力諸関係がやむことなく相互生成する(図 1)。その理論のそれぞれの構成要素は、全ての場所もしくは地域の生成に際して互いとはどけないように織り合わされているという意味で普遍的である。しかしながら、それらを織り合わすときには、普遍的法則にしたがうのではなく、歴史的状況に応じてさまざまなやり方がある。提唱された場所の理論は、結局のところ、歴史的にコンティンジェントなのである。それは公式を検証するのに役立つ理論ではなく、実際の場所や地域で現実の状況のなかへと調査に乗り出している研究者によって提起された諸問題に知恵を与えるよう意図された理論である。

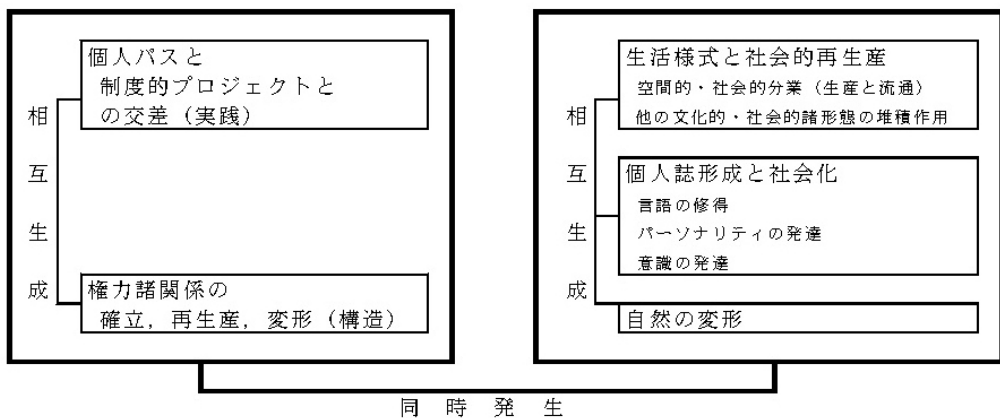


図 1 歴史的にコンティンジェントな過程としての場所（および地域）の構成要素。  
Figure 1. Components of place (and region) as historically contingent process.

この図を繰り返し参照することで、後続の残りの本文が理解しやすくなるだろう。

## 歴史的にコンティンジェントな過程としての場所の構成要素

### 社会的諸形態としての生産プロジェクトと流通プロジェクト

#### —生成する場所内部での空間的・社会的分業—

与えられたいかなる場所の内部でも、ある種の制度的プロジェクトは、住民の限られた時間資源を優先的に要求し、そしてその結果、行うことのできることに、知ることのできることに支配的な影響力を及ぼす。あるいは、ある種の制度的プロジェクトは、特定の人々の日パスと生涯パスに優先的にインパクトを与え、そしてその結果、個人の意識発達と社会化の細部に支配的な効果をもたらす。そのような支配的プロジェクトは、常に時間割り当てを決定し、それ以外の制度的プロジェクトとあらゆる制度的コンテキストの外部で単独で請け負われるプロジェクトの双方に対する優先権をスケジュール表に書き入れて、日パスを組み立てる。そのうえ、支配的プロジェクトは、参加者が彼らの日パスのなかに含めることが可能だと発見した他のプロジェクトの連なりと歩調に影響を与えるにとどまらない。加えて、一度ある人がいかなるプロジェクトに参加する約束をしたとしても、ある与えられた時間と場においていくつかの制約が影響してくる。他のどこかで同時に他の何かを行うことはできなくなる。空間的に離れていて、当該のプロジェクトが始まった後に終わるより早く始まるいかなる活動にも参加できなくなる。空間的に離れていて、当該のプロジェクトが終わるより先に始まるより遅く終わるいかなる活動にも参加できなくなる。同時性の衝突は全くないのだが移動時間の必要のために限界を超える他のいかなる空間的に離れたプロジェクトにも参加できなくなるのである<sup>8)</sup>。

当然、支配的なもろもろの制度的プロジェクトは、場所に結びつきたいくつもの構造化過程においてもっとも注目すべきパス—プロジェクト交差の要因となる。それらはまた、ある場所の内部でもっとも重要な構造的諸特性もしくは社会的諸関係の所産であり資源である。ほとんどの場所と時間において、支配的なもろもろの制度的プロジェクトは、ローカルな物質的生産や流通に、あるいはローカルに支配的

な生産様式の運用と一致してきた。しかしながら、他の文化的・社会的諸形態、とりわけ宗教的・儀式的・政治的制度のプロジェクトが、多くの事例において支配的であり続けている。物質的生産が社会生活には欠かせない条件ではあるけれども、「それはいつも社会生活の残りの部分を究極的に決定づけているわけではない」(Bhaskar 1978, 19; Sahlin 1974 も参照)し、またそれは必ずしも「全体として歴史的变化に決定的役割」を果たすわけでもない(Giddens 1981, 54)。

全ての制度的な生産と流通のプロジェクトは、それらがどこにおいても取り組まれているものではないという限りで空間的分業をとめない、またある人たちは違ったかたちで参加し他の人たちは全く参加しないという理由で、社会的分業をも必然的にとまなう。与えられたいかなる時間においてもある場所の生成に貢献する生産と流通のプロジェクトと、それらに付随する空間的・社会的分業は、それら自体で構造化過程の時間—空間の流れのひとつの結果なのである。

いくつかの状況において、とりわけ伝統的な農業集落の内部では、空間的・社会的分業はおもにあるいは完全にローカルなものである。例えば、与えられたある一筆の土地が耕作、播種、収穫プロジェクトのための場面として役立つたびごとに、もしくはある個々人といろいろな道具のパスがある位置で連結されるときに、創り出され再生産される分業のローカルな要素を考えてみればよい。そのようなローカルな分業は、家父長、村や部族の長老の会議、もしくは土地の特定の個所を統制する制度のなかで別のある権力を保持する個人や集団によってなされる、割り当てと役割分担の決定なしには成り立たない。さらに、このような決定は完全には自発的なものではない。それらは、実践的知識、状況に種別的な情報、意志決定者によって彼ら独自に蓄積されたパスの歴史の結果として保持される思想(価値観、信念、思考)もしくは宇宙論に基づいている。言いかえれば、決定はそれをなす人たちがかつて参加したもろもろの制度的プロジェクトとその結果得ることとなった社会化と意識の発達との交差、つまり構造化過程に対する彼ら自身の過去のかかわりの時間的・空間的細部の結果なのである。

さらに、空間的分業のなかで明白になり再生産される社会的分業は、偶発的なことのように思われ、そうではなくて、それはジェンダー、年齢、集団か階級に基づいた機会の差異に根づいているように思われ、その差異はその場所の内部で遂行されてきた実践と社会的構造との弁証法の在り方によって変わる。加えて、生産と流通のプロジェクトのまさにその実行は、構造に影響を受けまた影響を与えるもろもろの制度的プロジェクトにたずさわった以前の経験を通じて参加者が発達させてきた実践の知識、身体的技能、反射的推理なしには不可能である。

工業国では、空間的・社会的分業は、ひとつのローカルな構成要素であり続ける一方で、場所群からなるひとつのシステム内部においてマクロなレベルで発生する<sup>9)</sup>。したがって、とりわけ資本主義国において、しかし統制経済国においても、あるローカルな地区内部で生じる生産と流通のプロジェクトはよりマクロなレベルの構造化過程の弁証法に直接的もしくは間接的に連結している。これらの過程におけるもっとも重要な実践は、投資、購買、下請けの活動と接点をもっている職業提供の諸制度によって故意にそして無意識になされる立地決定である<sup>10)</sup>。このような決定は経済的構造によって条件づけられ、また経済的構造に対して貢献する。(このような決定もまた空間的構造に弁証法的に巻き込まれている。投資の一期間のあいだになされた決定は、実行された空間的分業に貢献するだけでなく、技術、投入資源、市場の不均等な空間的分布にもまた貢献する。この不均等性は、今度は、投資の後続の諸段階においてなされる立地決定に影響を及ぼし、おのおのの投資段階はさまざまな生産過程や労働性能の諸要求によって特徴づけられる<sup>11)</sup>。言い換えれば、後続の投資の諸段階が互いの上に重ねられるにつれて、立地決定は分布に変化し、そして分布は立地決定に変化する)。

別の言い方をすると、ある種別的な場所の内部で生じているさまざまな生産と流通のプロジェクトの混在は、さらに広範な国家的・国際的分業の一部としてそこになされた投資の歴史的連続と(Massey 1978, 235 参照)、資本のローカルな配置の生存とその規模に影響を及ぼしてきた経済的構造条件の連続との、両方の結果だろう。

投資を(ローカルに到達しようがしまいがお構いなしに)ローカルに配置することにつながる決定もまた、意志決定者が以前に構造化過程に参加した際の特異な記憶や彼らが独自に蓄積したパスプロジェクト交差の連年のゆえに、彼らがもっている実践的知識、状況に種別的な情報、動機づけを与えるイデオロギーから引き出されるに違いない。同じように、長期的なローカルな生産と流通のプロジェクトの細部における一日一日の多様性は、変動する市場状況のような構造化過程のマクロレベルでの表出に対するひとつの反応と、おのおのの工場管理者やそれ以外の責任ある意志決定者の特異なパスの歴史の両方として見るができる。

空間的・社会的分業がほとんど完全にローカルな基盤において生じようが、ローカルにと場所間での双方において生じようが、与えられたある地区内部に生じる生産と流通のプロジェクトに参加できる人々の数には、いつも融通の利かない限界が存在し得る。さもなければ、ある場所内部に存在している「生計を得る地位の総体的範囲」(Hägerstrand 1978, 143)と住民人口の総体的な一日の時間資源とのあいだに十分な均衡がとれていないのかもしれない。そのような不均衡は、たいてい、無理矢理ある人たちを移住させてどこか他のところで生じる物事に貢献させる要因となるか、場所のローカルな生成にかかわることになる新しい住民を引きつける要因となるかである<sup>12)</sup>。

#### その他の文化的・社会的諸形態の堆積作用

人間の頭脳は連想したり創造したりする途方もない能力をもっていることからすれば(Young 1978; Cooper 1980)、理論上、どのような地区内部でも起こり得ることには数限りない可能性がある。したがって、近代的広告業とマスコミュニケーションの均質化する影響のもとでさえ、同じ国家の異なる場所間で重要な対照性が明らかになる。しかしながら、どのような地区においても限られた数の生産と流通の諸活動とその他の文化的・社会的諸形態しか見られない。その理由は、ローカルに生じる混じり合った日常の諸実践が、このような諸実践とローカルなそしてもっと包括的な構造的諸特性とのあいだで進行している弁証法によって、普段は見えない形で制

約を、しかしまた機会を、与えられているからである。言い換えれば、ある場所で生産と流通のプロジェクトが支配的であろうとなかろうと、その住民たちによって執り行われた他の制度的に個人的に中心となる諸活動の種類が比較的少ないのは、構造化過程の複雑な堆積作用の結果とみなすべきだろう。そのような諸活動は、超有機体的な（つまり存在論的に独立し、個人を超越し、対立抗争から免れた、自己決定的な）文化<sup>13)</sup>によって、もしくはある社会体系の自律的な「必要性」（つまり「機能的緊急要件 functional exigencies」）<sup>14)</sup>によって、歴史的に指令を受けた行動とみられるべきではない。

ある場所の内部では残余の部分として姿を現し広く行きわたった文化的・社会的諸形態が見られる。構造化過程がこの文化的・社会的諸形態に制約（と機会）を与える手段は多種多様であり、歴史的なニュアンスをもち動的に相互関連している<sup>15)</sup>。重要な一組の制約は、ある場所の個人とその全住民の時間資源がともに限定されていることから生じる。一度時間と空間が生理学上必要な活動と支配的な制度的プロジェクトに割り当てられてしまったら、住民が日々の基盤や周期的な基盤のなかで個人的・集団的に受け入れ習得することのできる他のタイプの社会的相互行為と文化的に恣意的な諸実践はある一定数しか存在しない（Hägerstrand 1977 参照）。したがって、実践と構造の弁証法が、対立抗争か矛盾か革新的な意志決定によって、いくつもの制度的プロジェクトの創出、再定義、削除へと導くとき、二つの一般的状況のうちの一つが出現するだろう。すなわち、結果的にいくつかの既存の活動が修正されたり全体的に脇へと押しやられたりすることになる時間（と空間）資源に対する需要の増大か、他のプロジェクトの拡大や出現を許す時間（と空間）資源の解放のどちらかが生じるだろう<sup>16)</sup>。さまざまな制度的プロジェクトの時間-空間の要求が変わることで、与えられたある地区で生じ得ることもたらされるであろう影響の大きさは、しばしばどれくらい生産プロジェクトが家族または他の世帯単元において中心になっているのか、どれくらい職場と住居が空間的・機能的に離れているのかということに左右される。

言語は、それ自体ひとつの専制的な文化的形態で

あるが、制約と機会を与えるもう一つの決定的な条件として、与えられたある地区で生じ得る文化的・社会的諸実践の組み合わせに影響を及ぼす。言語はパス-プロジェクト交差を成し遂げるために欠かすことのできないものである。なぜなら、言語は物や出来事や経験を描写し、類別化し、差異化するための基礎を与えるものであり、また意図がややもすれば成り変わるイデオロギーや、社会的支配の維持と変わるところのないものだからである（Geertz 1964; Foucault 1970, 1972; Barthes 1972; Gouldner 1976; Coward and Ellis 1977; Giddens 1979; Olsson 1980a 参照）。さらにそれは、それぞれの制度的プロジェクトを構成するもろもろの仕事をお決まりのあるいは独創的なやり方で決定し、互いに理解させ、後に再整理するための媒体となるいう点でも、欠かすことができない。しかし、言語もしくはローカルに存在する他のいかなる記号システムも、生じる物事に前もって必要だというだけではなく、言語の修得はプロジェクト参加という時間-空間の種別的な諸状況のひとつの帰結でもある。したがって、ローカルに展開する日常生活や社会的再生産の細部として、住民の言語の境界は彼らの場所（もしくは彼らが決定し参加できるプロジェクト）の境界を意味し、その一方で、彼らの場所の境界は彼らの言語（もしくは彼らが習得できる語句やその他の言語的諸要素）の境界を意味する<sup>17)</sup>。しかしながら、ちょうど生じる物事が言語に対し静的な制約を加えないように、言語は生じ得る物事に静的な制約を加えない。語句、移ろう意味、発音、一言語の文法は、おもに制度的プロジェクトを通して、（個人、社会、場所の生成に沿うかたちで）常に生成しつつある。言語の構成要素は安定して再現する制度的プロジェクトにおける日々の使用を通じて極めてゆっくりと意図なく変更されるか、あるいは制度的プロジェクトの導入、廃棄、修正とそれにともなうパスに結びついた要求を通してますます、そして時折根元的に変えられるという意味で、言語は常に生成しつつあるのである。

与えられたある時間にある場所の内部でこれまでに堆積された文化的・社会的諸実践の配列もまた、利用可能で有効な実践上の諸技術やその他の知識、そしてその結果起きるかもしれない諸活動を制限し

たり促進したりするだろう。行うことと知ることは弁証法的に絡み合っているので、ある場所において知らないことの性格は実際そこで起きるかもしれない文化的・社会的プロジェクトに制約を与える。スリフト Thrift(1979; 1983, 45)が提案してきたように、少なくとも5つの知らないことの相互に関連するタイプが同時にひとつの場所に存在できる。

- (1) ローカルな全てのまたは一部の住民に対して「全く知られていないという点で、知られていない、知ることができないこと」。
- (2) ローカルな全てのまたは一定の住民がもつ「意味の枠組みのなかには入らない」という点で、「理解されていないこと」。
- (3) ローカルな「一定の住民に対して隠されているという点で、隠されていること」。
- (4) ローカルな全てのまた一部の集団にとって「正しい」または「自然である」として当たり前になっているという点で、議論されていないこと」。
- (5) ローカルな全てのまたは一定の住民によって「歪められた形でのみ知られているという点で、歪められていること」。

ある場所における知識と知らないことの詳細にわたる特質は、もちろん、どの程度ローカルな諸制度が、非ローカルに統制されているか、あるいは非ローカルな相互行為にかかわっているかということに影響されるだろう<sup>18)</sup>。

最後に、全ての住民の社会的・経済的な境遇は起り得ることを決定するのに一役買っている。それは、経済的・社会的資源が、種別的な規則や規範のコンテキストのなかで利用されるときに、生産と流通の領域外にある制度的プロジェクトへの参加を可能にしたり禁止したりするという限りで言えることである。経済的・社会的境遇によって規定される種別的な文化的・社会的諸形態への参加の制約は、ある観点に立てば、生じる物事に対するそれ以外の制約から弁証法的に切り離すことができない。というのは、個人誌が形成されるにしたがって、社会的・経済的境遇は種別的な支配的制度の約束事、言語、知識に翻訳されるようになり、それと同時に種別的な支配的制度の約束事、言語、知識は社会的・経済的境遇を強化したり変形させたりするからである。もっと本質をついた言い方をすれば、もろもろの資

源、規則、規範に基づく場所に種別的な制約と機会を与える条件について語るということは、個々人、諸集団、諸制度のあいだにある地理的に歴史的に種別的な権力諸関係に基づく場所に種別的な制約と機会を与える条件について語ることなのである。この後でもう一度強調されるように、社会的構造の中心にあるそのような諸関係は、実践に影響を与えかつ実践から影響を受けるものである。

### 個人誌の形成

構造化過程の物質的継続性と、その結果、歴史的にコンティンジェントな過程としての場所の物質的継続性は、おそらく言語が修得され、パーソナリティが開発され、思想が進化し、意識が発達する場である個人の個人誌形成のレベルでもっとも簡潔に明らかになる。

ある途切れることのないパスを追跡していくと、個人は離れた別の制度的プロジェクトに遭遇することも、ある制度的コンテキストから外れて離れた別のプロジェクトに散り散りに分離したままの状態ですべて「独立的に」取り組むこともないので、個人の個人誌形成は構造化過程に継続性をもたらす。そのかわり、プロジェクトからプロジェクトへ、今ここで詳しく述べられるものからもう一つのそれへ、個人がたどる時間-空間を通じて絶えることのない進展は、複雑な「外部-内部」弁証法によって、肉体的行動と精神的活動や意図のあいだに、人が行うことと知り、考え、夢見ることとのあいだに繰り返される弁証法的相互作用によって、特徴づけられる。

外部の肉体的行動、つまりあるプロジェクトに参加するために、またプロジェクトからプロジェクトへと到達するために、種別的な時間的・空間的位置を貫いて個人のパスをたどることは、あらゆる場合に、結局内部の精神的活動に至ることなく生じることはあり得ない。外部の肉体的行動は、別の行動を取っていれば経験されなかったであろうもろもろの情動や情感とともに、種別的な環境的諸要素、いくつもの個人的接触、影響、そして情報一般と常に直面することになる。しかし、個人のパスに対して外部の肉体的行動を加えれば、内部の精神的活動が要求されることとなる。それは、すなわち内省、物に埋め込まれた意味深長な記号体系の認識(Burke

1969; Harre 1978 参照), 実践的推理の遂行, 意図や無意識的目標の形成, 新しいプロジェクトの可能性の想像力豊かな創出, もしくは基本的な時間地理学の制約を打ち破らないかたちでの代わりとなる新しいまたは既存のプロジェクトの選択である。そのような精神的活動は, それ自体, 時間的に空間的に種別的なプロジェクトに以前参加したなかでその個人によって修得された経験と知識に基づいている。その外部-内部弁証法は, ある個人があらゆる制度の働きから外れて自分で決めたプロジェクトに携わっているときでさえ作用している。それというのも, 人は彼女や彼のパスと特定の制度的プロジェクトとの以前の交差によって残された精神的痕跡を免れることはできないからである。「独立した」プロジェクトの創出と決定は, 社会化, もしくは制度的プロジェクトとのパスの交差によってのみ修得され得るものであり, したがってそれと結びついている実践的知識には, 常に文化が専制的に作用する性質または要素が存在している。

場所の生成における個人レベルでの継続性もまた, 外部-内部弁証法に類似したもう一つの弁証法的関係性に連結する可能性がある。「生涯パス-日パス」弁証法は, 集団, 階級, ジェンダーの差異のローカルなそしてより広範な再生産に対して中核をなすものである。それは長期間にわたる関与と日常の実践のあいだの相互作用, つまり一方で個人の長期間の制度的役割の以前からの継承や日常のプロジェクト参加の結果得られた記録, 他方でその個人に開かれていた客観的な長期間の機会, その二つのあいだの相互作用に関係している。この弁証法の操作を通じて, 成人した個人があらゆる時点で現実的な選択をおこなうときに踏まえている長期間の制度的役割は, 本質的に, 個人が以前に関与してきた制度的役割が数々の種別的な日パスに影響を及ぼしてきたやり方で仕切られかつ開放されるのである (Bourdieu 1977; Bourdieu and Passeron 1977 参照)。個人の生涯パスがある与えられた家族役割やその他の制度内部で専門化された役割に関与するたびごとに, その個人の日パスは種別のお決まりのもしくは型破りなプロジェクトと結びついた諸活動に断続的に振り向けられるだろう。しかし, 正確なローカルな地点と多かれ少なかれ固定された時間的な位置でそう

した活動に参加し, その結果制約された他の活動とプロジェクトに参加するときに, 個人は日々経験を積み, 他の人々と相互に影響し合い, 能力を獲得したり強化したりし, そして他のやり方では同じ形では向き合っていないであったであろう象徴的価値を帯びた無生物の物体, 観念, 情報に遭遇する。このような日パスの経験, 相互行為, 遭遇は, 時として他の長期間の制度的役割の可能性を発見することにつながり, ある個人の個人誌にみる歴史や他の個人から現れる競争相手にもよるだろうが, その個人はその可能性に参入できる実際の機会をもてるかもしれないしできないかもしれない。さらに, このような日パス上でのさまざまな遭遇は, 個人が自分自身を定義, 再定義し, 長所と短所を刷新し伝承し (Erikson 1975), 意図を形成するのに役立つ。そういうわけで, そうした遭遇は, 探し求めたり決定したりするべき他の長期間の制度的役割が, もしいくらでもあるのなら, その選択に際して個人の意識的, 無意識的な動機を与える基礎となる。もちろん, 一度新しい長期間の制度的役割の選択を喜んでまたはやむを得ずおこなったならば, 新しいプロジェクトの活動のバンドルはときどき個人の日パスに組み込まれなければならない, そして新しい経験, 相互行為, 遭遇が続くことになるだろう。

この二つの弁証法の接続操作が意味するところは, ある与えられた場面におけるある個人のそれぞれの行動, 彼または彼女の個人誌に細部を加えふくらませていくもののそれぞれが, その個人が独立的に存在させているパーソナリティや意識に理想的なかたちで帰属させることができないということである。そうではなく, 人にあるプロジェクト参加の選択をさせたり, 他者によって決定された状況のなかで与えられたあるやり方で行為させたりする, 並外れたパーソナリティと意識の属性とは, 種別的な既存の制度によって決定されあるいはその影響を受けてきた日常の経験, 印象, 記憶のユニークな蓄積の結果とみなされるべきである<sup>19)</sup>。つまり, パーソナリティと意識は独立しては存在せず, 過去のパス-プロジェクト交差とそのような交差の基礎となる権力諸関係の複雑な副産物なのである<sup>20)</sup>。たとえ景観の創造や利用において自己表現がいかに制限されたものであろうと「自由」で自発的なものであろうと, そ

れは常に個人誌的なそして場所に種別的な歴史的・社会的コンテキストから生じ、同時にそれは個人誌と場所が途切れることなく生成することに貢献する<sup>21)</sup>。

個人誌形成の物質的継続性は、ローカルな諸制度の継続性に貢献するという理由で、場所における構造化過程の途切れることのない性質にとってもまた極めて重要である。いかなるローカルな制度の継続性も、ただ単に、その統制下にあるさまざまな施設の物理的持続や、それが永続させる形式的な規則、規範、規制に基づくことができない。ある場所の制度の継続性は、ある程度、個人が「もろもろの実践を「幾重にも重ねて」深層の時間-空間のなかにある[そうした]制度へと再構築する」(Giddens 1981, 165)ときに、彼らによって利用される記憶の痕跡、実践的知識、公式化されていない規則や規範、そして複雑な技術に依存する。言い換えれば、場所において諸制度が調和的に永続するには「人間の行為の流動」(Shotter 1983)が必要である。それにはパスプロジェクト交差の連続が必要であり、それによって大部分が承認されていない権力諸関係のコンテキストのなかで振る舞っている個人が、意図せずしてそれぞれの状況を再生産したり一時的な出来事を制度的継続 *durée* に接続したりする一方で、同時に彼ら自身の個人誌を形づくる。個人の社会化(もしくは個人誌の形成)と制度的(または社会的)再生産は、おのおのが絶え間なく他方を生成しながら構造化過程のなかで弁証法的に織り合わされているので、場所におけるその二つの物質的継続性と時間-空間の流れを引き裂いて離しておくことはできないのである。

### 自然の変形

場所に種別的な個人誌が社会的再生産を通して形成されるとき、そして場所に種別的な社会的再生産が個人誌の形成を通して発生するときに、自然環境は永久に変形される。自然界の変形は場所の生成と切り離せない。

明らかに、原野が開墾され、耕され、種を播かれ、刈り入れされるとき、居住や製造のための施設が組み立てられるとき、木が燃料や建設資材として切り倒されるとき、水が飲用や灌漑のために転用される

とき、あるいは土が埋葬用に用意されるとき、自然は改変される。しかしながら、場所に結びついた思想、知識の適用、行動を通して地表面を意図的にまた意図せずして変化させる人間の役割は、生産プロジェクトと場所の可視的な要素を創り出す建設・土地利用プロジェクトに限定されるものではない。外的自然の変形もまた、制度的プロジェクトやそれとは「独立して」決定されたプロジェクトのほとんど全てにおいて人工物や自然物を使用することによって間接的に助長される。したがって、本稿を読むというプロジェクトに取り組むことで、あなたはそれが印刷されているページ、あなたの下にある椅子やあなたが向かって座っている机やテーブル、身につけている衣服、そして恐らくノートを取るためのペンや紙を使うことで、外的自然の変形にわずかばかり貢献しているのである。消費志向の社会では、ローカルに生じる物事と外的自然の変形との連結は不透明であり、さもなければほとんどの個人に意識的に知覚されていない<sup>22)</sup>。場所と結びついたプロジェクトにおいて人工物や自然物を利用することでどの程度非ローカルというよりローカルな自然の変形をもたらすことになるかは、もちろん、場所間での歴史的に種別的な分業の在り方にかかっている。

人間の身体は生物学的に構成され、それゆえ自然の一部である。したがって、場所の生成にかかわることで、人々は社会的経験やその他の経験によって内面的に変形されるだけではなく、彼らの身体的性質も彼らのパスが誕生から死まで容赦なく屈曲するにつれて変更される。どんなに努力してみても、「人間は、石と同じく、出現し消滅する抗うことのできない自然の流れの一部である(Hägerstrand 1976b, 3)」ことを否定できない。

場所における構造化過程に常にとまらぬ身体上の変形と外的自然の変形はまた、時間地理学的視点にしっかりと根づいているパス収斂-パス分岐、創造-破壊、もしくは存在-不在の弁証法の用語でも表現され得る(Pred 1981a, 244-45 参照<sup>23)</sup>)。人間は重力に反抗できないために、制度的プロジェクトとそれとは「独立して」決定されたプロジェクトとが、自然環境の諸要素あるいは外的自然から得られた人工物の描き出す時間-空間パスと絶えず接触し続けるのでなければ、彼らがこうしたプロジェクトの途

切れることのない連続体を通して彼ら自身のパスを操縦することはできない。したがって、先に結合していたそれぞれのパスが分岐し、以前の結合存在を破壊し、ひとつの不在を形成するという必要条件を満たさなければ、いかなる活動もパスの収斂や結合存在の創出を介して生じることがない。同様に、新しい活動連合においてパスが収斂し、もう一つの結合存在を創出するという必要条件が満たされなければ、いかなる活動もパスの分岐やその結果としての不在を介して終結することがない。もっと単純に詩的に言うなら(Eliot 1942),

終わりをなすことは始まりをつくることである。  
終結とはそこから我々が出発するところである。

言いかえれば、社会的行為、組織、相互行為を構成するのに役立つ時間-空間を通じた個人の運動の網目は、「『存在/不在』の諸過程」と同じことを表し、連続的に「構造化された差異」<sup>24)</sup>とみなされ、常にその運動は意図しない接触あるいは計算された利用を通して極めてゆっくりとした、もしくはもっと際立った外的自然の変形に貢献するのである。

パス収斂-パス分岐の弁証法に対して敏感であれば、全ての人工物と同じく人間によって形づくられた景観の全要素は、生命のないものではなく、決して終わることのない自然の変形の一部であるそれら自体の個人誌を抜きにして考えられないものだとこのことを認識せざるを得なくなる。それどころか、それらの存在とその新しさや古さの状態、それらの活発な使用や廃棄は(それらの象徴的な意味とともに [Lowenthal 1975 参照]), 常に以前のプロジェクトの成果、人間や人工物や自然現象を含む以前のパス収斂とパス分岐の成果とみなされるべきである(Hägerstrand 1974a 参照)。

自然が場所の人工的諸要素に変形されるにつれて、そしてローカルな空間が社会化と社会的再生産とのやむことのない弁証法によって構造化され新しい意味を賦与されるにつれて、なおそのうえに生じ得る物事が制約とともに機会を与えられる。もっと正確に言えば、ローカルな外的自然が変形されるにつれて、そして独立的な土地利用、建造物群、コミュニケーションの輪が景観のうえに現れるにつれて、さらなる自然環境の改変を含むある種の出来事やプロ

ジェクトは、空間の希少性によって、地区単元に詰め込むことのできる能力の限界によって、そしてある定められた(また変形された)地点からもう一つの地点へ移動するために必要となる時間の投資によって、妨害されたり禁止されたりする。標準的に言って、新しいプロジェクトがローカルで収容されるためには、それらを構成するもろもろの仕事が、変形された自然がもつ既存の枠組みのなかで、そして支配的な関連する諸制度によるプロジェクトの要求の範囲内で、空間的に時間的に調整可能でなければならない(Hägerstrand 1974a, 276; 1976a 参照)。

自然の変形は構造化のローカルな表現から、歴史的にコンティンジェントな場所の生成から切り離すことができないため、ローカルな社会的構造の核心にあって広く行きわたっている権力諸関係を見極めなければ、それを理解することはできない。大部分が個々人、諸集団、諸制度のあいだに生じる歴史的に種別的な権力諸関係は、次のことを決定する。

- (1) どの自然変形プロジェクトが許され、妨げられ、禁止されるかということ。
- (2) どのような方法で、希少なローカルあるいは非ローカルの自然資源が、労働によって直接的に、そして他の手段によって間接的に改変されるかということ。
- (3) 場所の繁栄や単なる生き残りのために人間が創り出した諸要素のうち、いずれの要素が荒廃し、さもなくば粉碎されるかということ。

自然が変形される目的が、家族の生存、集団の生き残り、共通の共同体の利益、個人または企業の利益のいずれであっても、あらゆる資源統制とあらゆる行動の規則・規範が息づいている限り、権力諸関係は存在する。

#### 権力諸関係の確立、再生産、変形

権力諸関係は目に見えない構造の接着剤であり、場所が継続的に生成するために欠かせない時間-空間の種別的な諸実践において個人、社会、自然と一緒にしておくことのできるものであると示唆されてきた。しかし、ひとつの社会的関係としての権力もつ物的に把握し得ない諸特性は、いかにして概念化され、場所の生成に連結され得るのであろうか。

ひとつの社会的関係として権力を概念化する試みは無数にあり、それらは千々に異なっているように

思われるのに、事実上その全てにある共通の糸が通っている<sup>20)</sup>。権力と権力諸関係は、たいてい制度的に埋め込まれていて、常に一つ以上の行動する個人、集団、階級を含み、そして実際に実行されたあるいは潜在的に実施可能な行動である。したがって、権力諸関係がどのようなものであっても、いかにかまえどころのないものであっても、ミクロレベルかマクロレベルのどちらにあっても、それらは行動と日常の実践の領域から(Giddens 1976, 1979 参照)、あるいは誰が何をいつどこで行うかということの直接的または間接的統制から切り離すことができない。したがって、権力諸関係は、他者を巻き込むある種別的なプロジェクトの内容をあらまし正確に決定する能力か、あるいは他者を巻き込むある特定のプロジェクトを構成するさまざまな仕事を監督、管理、調整、委任する、さもなければ統制する能力として考えることで、より明確にできる。同様に、権力諸関係は、ある特定のプロジェクトに他者が参加することを禁止したり妨害したりする能力とみなすことができる。このことは例えば次のことを通じて実現するだろう。すなわち、(1) 規則、公式の法律、消極的な承認、経済障壁の適用、(2) 限られた時間資源に対する優先的要求の決定、あるいは(3) 力の実際のまたは脅迫的な利用である。場所における構造化過程のまさにその本質は、決まりきったそして型破りなローカルの諸実践の根底にある権力諸関係そのものが、日常のそして型破りな諸実践によって確立され、再生産され、変形されるような種類のものである。

権力諸関係の確立と再生産は、第一に、プロジェクトの決定や明示的なあるいは暗黙の規則が確立され繰り返し執行されることと同一視される。(そのような諸規則はプロジェクトへの参入あるいはプロジェクト実施の統制、調整、規正に付随するものようである)<sup>20)</sup>。第二に、種別的な制度に埋め込まれた権力諸関係の確立と再生産もまた、普通は、全体としての関係する制度的単位によって、あるいはその単位の現在または過去の権力行使者によって、意味に満たされた資源の蓄積に基づいている。プロジェクト成立に必要な物質的資源、あるいは財産、象徴的資本、地位、専門化された知識のようなそれ以外の社会的に組織された資源が獲得されなければ、

ある制度的役割保持者はプロジェクト決定や他者に一定の効果を与え得る規則に手の届く位置につくことができない。第三に、権力が行使される状況を除けば、種別的な権力諸関係の確立と再生産は、特定の権力服従者(他の制度的状況においては権力保持者であるかもしれない者たち)が、喜んであるいは仕方なしに、曖昧な、柔軟な、もしくは厳格なプロジェクト決定と彼らが直面する規則を受け入れようとする、さらに一般的な傾向を前提にしている。

権力諸関係確立と再生産のこれら三つの特性のそれぞれが、以前のパス-プロジェクト交差や時間-空間の種別的な諸実践から切り離すことができない。結局のところ、プロジェクト決定と規則に翻訳される制度的権力保持者の目標と意志決定は、彼ら自身の個人誌のユニークな展開のなかで彼らが所有することとなった実践的知識、状況に種別的な情報、思想の諸要素に何らかの仕方で基づいているに違いない。さらに権力資源は、決まりきったそして型破りな諸活動に表れる経済的競争や他の類型の競争を通して、あるいは他よりもある種の生育環境において社会化された個人に資源の確保を容易にする生涯パス-日パス弁証法を通して、利子を生み出す場合が非常に多い(Bourdieu 1977; Bourdieu and Passeron 1977; Giddens 1973 参照)。さらに、プロジェクト決定と規則を受け入れる意識的または無意識的な傾向は、社会化やパーソナリティの発達、さもなければ個人誌形成から切り離すことができない。しかしながら、もし権力関係確立と再生産の諸特性が以前の時間-空間の種別的な諸実践から切り離せないならば、その同一の以前の諸実践はそれ自体が以前の権力諸関係から切り離せないことになる。したがって、またしても、構造化過程の永遠の弁証法の渦巻が場所において展開するようにここでも見られるのである。すなわち、実践と社会的構造はともにもう一方の所産でありかつ資源なのである。

制度的に埋め込まれた権力諸関係のローカルな変形は、それぞれの時間-空間の種別的なプロジェクトに結びついた多種多様な歴史的に特異な状況によって促進されるかもしれない。しばしば権力諸関係の変形は、純粋にローカルなあるいはもっと広範に広がった対立抗争を通してもたらされる。(対立抗争は、ほとんどの制度における個々の権力行使者と

権力服従者とのあいだに、潜在的あるいは顕在的に存在する。彼らのプロジェクトがお互いのあいだに経済的・政治的・社会的競争をもたらすとき、あるいは時間割り当てと予定組み込みの優先権について不同意があるとき、対立抗争はもろもろの制度のなかで発生するだろう。マクロレベルの対立抗争は、資源の所有と利用において差異のために、さまざまな集団、階級、制度間で生じるだろう)。それに加えて、権力諸関係の変形は、時として矛盾や逆転的な最終決定が原因となって生じるが、それによって同じタイプの数多くの制度的単位によるプロジェクトの実施が、プロジェクト決定や規則形成の根底をなす目標に反する結果や危機的状况を産み出すこととなる(Elster 1978; Giddens 1979; Olsson 1982, 230 参照)。

対立抗争と矛盾(あるいは構造的分裂)は、権力諸関係が変形されるためのおそらくもっとも重要なものだけけれども、実践と結びついた唯一の手段ではない<sup>27)</sup>。しかしながら、変化の起因が何であれ、ここで定義されているように、権力諸関係は、すでに採用されたプロジェクト決定と規則の改変、もしくはプロジェクトとそれにとまなう内容決定と諸規則の全面的な削除がなければ変形されることはないことを認識することが極めて重要である。

権力諸関係が場所の生成においてもっとも効力を発揮する側面は、人々が行うことを直接的あるいは間接的に統制することの裏面に位置している。それは、人々が何を知らぬのか(そして何を言うことができるのか)ということと、どのように彼らは知覚し考えるのかということに直接的あるいは間接的に影響を及ぼす点にある。個々人が種別的な時間と場所における諸活動に加わり、ある制度的プロジェクトにおいて他者の権力に服従するとき、彼らは(分割不能な存在であるために)同時に他の場所で生じている出来事を直接知ることができない。また、彼らの限定されている時間資源と移動の時間需要のために、彼らはあるプロジェクトに関与することで、彼らの時間-空間の到達範囲外に置かれたより遅い出来事について直接知るようにはならない。さらに、プロジェクトを基盤とした言語の修得によって与えられる意味の枠組みは、さまざまな出来事のある種の知識や理解、そして知的入手できる範囲を越えた

情報を与えてくれる(Bernstein 1975 参照)。

さらに重要なことに、もろもろの制度的プロジェクトの実施において言語と諸規則を慣習的に利用することで、そうしたプロジェクトを円滑に進める物体や出来事に具現化された以前の社会的活動がしばしば覆い隠されてしまう。結果的に個々人は、彼らがプロジェクトに参加することを人間によって創り出された文化的に恣意的なものというより自然なものとして特徴づけながら、詳細にわたる諸状況と社会秩序というものを考えるようになる。いかなるプロジェクトにおいても男たち女たちが直面するさまざまな制度的統制機構、物体、出来事が当然視されたり、言及されなかったり、検討されなかったりするようになり、それらが彼ら自身から離れていて別のあり方は不可能な否定できない事実とみなされるようになる限り、権力の服従者たちは自らに行使されている究極的権力に盲目である<sup>28)</sup>。さらに、ある制度的プロジェクトの要素全てを自然なものとして個人が受け入れることによって、与えられた諸状況のもとで、行動と言説の両面において不自然で、異常で、非合理で、考えがたい、非論理的な、違法の、不適切な、無責任で、とんでもないものに関して、その制度の権力保持者によって保たれる見方を知らず知らずのうちに(あるいは知っていないながら)吸収してしまうということに、眼を向けないままになるのである(Foucault 1970, 1972 参照)。そして、ラカン Lacan(1968)などがフロイト Freud の基礎の上に立って論じてきたように、家族や他の諸制度の日常の諸実践において使われる言語の厳密なカテゴリーは、無意識を形づくる抑圧の原因となり、「非を認めない」、「退廃的な」、タブーを帯びるもの原因となり、また抑圧された欲望、「自己規律」、発生したり個人のパスの一部になったりすることを絶対に禁じられているもの原因となるのである(Olsson 1980b 参照)。

最後に、権力諸関係の確立、再生産、変形が場所の生成に貢献する歴史的に種別的な様式は、そのような諸関係のミクロレベルすなわち個人対個人の表現とマクロレベルすなわち制度間での表現とのあいだに存在するいくつかの相互連関に左右される関係にあるのだということが強調されなければならない。権力諸関係の確立、再生産、変形

が場所の生成と織り合わされるまさにその方法は、ローカルな諸制度とそれらの象徴体系が非ローカルな統制と取引に依拠している程度、あるいはローカルな対面による社会的相互行為がローカルな社会システムの統合と一致する程度、齟齬を来す程度によって決まる。目下のところ、例えば、日常の諸実践の細部に浸透している非ローカルに基づく経済的制度や国家制度の役割こそが、ローカルに種別的な諸実践と権力諸関係の歴史的な堆積作用と組み合わせられて、資本主義あるいは統制経済社会主義のいずれかにかかわった諸国におけるそれぞれの場所の生成に対し、ある示差的な複雑さと異質性を授けるのである<sup>29)</sup>。

### 理論に基づく学術調査プロジェクト

このハイレベルの一般化を越えていくとき、場所とみなされるもの全てを、そして時間地理学と日々展開する構造化過程の見地から与えられた地区内で生じるもの全てを概念化することを越えていくとき、何が起こることになるのだろうか。理論を入念に作り、修正し、精製することがここまでしか進められないということ、そして使われた概念のカテゴリーが弁証法的な隠匿と探査を演じたり、繰り返しもう一方の傍らに出現したり、目に見えない境界線を越えてしまったり、もう一方の内部で消滅してしまったりするのをやめることは決してないだろうということが認識されるとき、何が起こることになるのだろうか。その過程のある種の構成要素が普遍的に存在しているのにいかなる普遍的法則も存在しないような、種別的なさまざまな場所と時間を検討しようと試みるとき、何が起こることになるだろうか。つまり、歴史的にコンティンジェントな過程としての場所の理論に基づく地域地理学あるいは場所中心の地理学は、どのような経験的内容をもつことになるのだろうか。相互関連した社会の全体性を問うあらゆる理論のように、この理論はいかなる与えられた一式の歴史的状況に対しても経験的に検証することができない。その種のあらゆる理論のように、それは現実の歴史的状況における実際のさまざまな場所に向けられた断片的調査に活気を与え、方向性を与

え、もっと広くて深い意味を獲得させるための枠組みとして役立つのである。

例えば、近年の研究で、私は19世紀初期にスウェーデンのスコーン Skåne 州の一部にある村々に行われた、いわゆるエンスキフト enskifte (整理統合) という囲い込みの影響を検討した(Pred 1984, 1985)。その研究は村々を生成する場所として扱い、ここで提示された理論に基づいて、次のような問題を提示する。スコーンの平原におけるエンスキフトの囲い込み直前の数十年にわたって自作農家庭の構成員がしたがった日パスには、どのようないくつかの基本的構成要素が見られたのか。個人誌形成や村レベルで展開する構造化過程へとつながるパスプロジェクト交差には、どのようないくつかの一般的特徴が見られたのか。日パスの基礎となる権力諸関係は何なのか。実践に基づく意識のどのような特徴が、幾人かの自作農に囲い込みの手続きを先導するようにし向けたのか。エンスキフトの囲い込みの結果として、日パスと権力諸関係はどのように変更されたのか。

さらに一般的には、少なくとも三つの経験的論点がある。歴史的にコンティンジェントな過程としての場所の理論から自ずと浮かび上がる。第一に、支配的な制度的プロジェクトについての論点がある。つまり、それらが参加者の日パスと生涯パスに及ぼす場所の種別的な効果、それらが刷り込まれた景観、そしてそれらから生じそれらが貢献する権力諸関係についてである。少なくとも三つの先行研究が、関係した個人の日パスと生涯パスに対する変更された支配的プロジェクトの効果を検討してきた(Pred 1981c; Christopherson 1982; Miller 1983)。

第二に、場所における構造化過程の諸要素の一つの反映として、特定個人誌の形成という論点がある<sup>30)</sup>。そのような論点は、個人の生活史、マクロレベルの社会現象、社会の変化のあいだのつながりに関心を示す他の学問分野において表現されている、刷新された関心に沿うものである<sup>31)</sup>。ヘーゲルstrand Hägerstrand(1982)が最近発表した彼自身の少年時代の分析は、そのようなアプローチの可能性の優れた事例を提供する。

最後に、場所の感覚についての論点がある。場所の感覚は、それ自体で成り立つ何かとしてではなく、

個人の意識が生成するための要素になる現象として、したがって個人誌形成と場所の生成から切り離せないある現象として存在する。時間地理学と構造化理論の両者を並置するならば、単行本ですら、時として、与えられたある時期にわたって種別的なある場所において見られた、場所の感覚の根底をなす諸要素のいくつかについて、大いに伝えることができる<sup>32)</sup>。

これらの学術調査テーマのいずれを追求するときにも、時間地理学のダイアグラムを用いることが中心になるべきである。場所の生成へと至るもろもろのパスとプロジェクトは、常に物質的継続性、たくさんの事物の同時発生、数多くの可能性の削除をとまなうが、それらこそが、時間地理学の表記法によって捉えることができるが慣習的な直線的言語では簡単にすり抜けてしまう、現実がもつ基本的側面である(Olsson 1980a 参照)。

### ありふれたいくつかの結論

ありふれた場所とは何であるか。

それは常に生成する場所である。それは場所としての道具立てになるものと、他ではなくある制度的プロジェクトが支配的な歴史的に種別的な状況の下で生じる物事とが、常に生成することである。

それは活動し始める（場所へと生成する）権力 power (be)coming into play(ce)である。

それは実践と社会的構造の終わりなき弁証法がロイカルに自身を表現する過程である。

それは社会的・文化的諸形態の再生産、個人誌の形成、自然の変形がやむことなく相互生成し、同時に時間-空間の種別的なパス-プロジェクト交差と権力諸関係とが継続的に相互生成する過程である。

### 注

1) レルフ Relph, バッティマー-Buttimer, トゥアン Tuan などの新しい人文主義地理学者たちが場所や場所の感覚をどのように捉えてきたかという問題にまつわる重要な批評については、コスグローブ Cosgrove(1978), ハドソン Hudson(1979), セイヤー-Sayer(1979), レイ Ley(1981),

ブレット Pred(1983)を参照のこと。

- 2) 社会過程としての場所、地域、空間編成にまつわる最近現れた他の批評については、ソジャ Soja(1980), アリー-Urry(1981), グレゴリーGregory(1981, 1982), スリフト Thrift(1983)を参照のこと。
- 3) ヴィダル学派の伝統やその今日の人文地理学への影響にまつわる英語を媒体とした議論については、バッティマー-Buttimer(1971, 1978), レイ Ley(1977), ベルドゥレイ Berdoulay(1978), グレゴリーGregory(1981)を参照のこと。
- 4) 実際、社会科学において関心の「対象 object」となるものはいずれも、ある複雑な過程のつかの間の徴候とみなされるべきである。そのような視点と、とりわけプリゴジン Prigogine(1980)によって言い表されたような、流動と「静的な」幾何学的構造について自然科学において出現しつつある議論とのあいだの類似性について批評するショットターShotter(1983)を参照のこと。
- 5) 私が論じている学派の思想家と認められる人たち全てが、実際に「構造化」という用語を使用しているわけではない。きわめて多くの著者たちが直接的に間接的に構造化理論につながっているけれども、次の作品群は私が自らの見解を抽出する際にとりわけ念頭に置いたものである。パーガーとルックマン Berger and Luckmann(1967), ギデンズ Giddens(1976, 1979, 1981), コジーク Kosik(1976), ブルデューBourdieu(1977, 1979), トゥーレーヌ Touraine(1977), ウイリアムズ Williams(1977), バスカル Bhaskar(1978, 1979), アブラムス Abrams(1983), ショッターShotter(1983)。そのうちの何人かはまた、ユルゲン・ハバマス Jürgen Habermas のある種の作品を構造化理論と結びつけようとした。
- 6) このことは構造化理論家に対してだけ向けられる批判ではない。構造化の特定の主張者たち、とりわけギデンズの著作は次のような批判を受けてきた。すなわち、それらは、人間行動にあまりにも「度が過ぎる」自由を割り当て、歴史的な種別性を十分に加味せず、互いに歴史的にコンティンジェントに連結している相対的に自律したさまざまなレベルの諸構造が存在していることを無視し、そして構造的諸特性は前もって構成されているというよりその「事例説明」においてのみ存在するような一時的なものだと主張していると批判されてきた(Carlstein 1981a; Layder 1981; Thrift 1983)。このような批判のいくつかの部分は、ギデンズの最新の著書(Giddens 1981)を踏まえれば、少なくとも部分的には認めることができるし、その他の部分も（とりわけ諸構造の前もって構成されている性質の問題についての批判は）、他の構造化理論家の著作に対して説得力をもつものではないだろう。
- 7) このような諸概念について詳しく解説し図式的に表現している著作については、ヘーゲルストランド Hägerstrand(1970, 1974b), ブレット Pred(1973, 1978, 1981a), パークスとスリフト Parkes and Thrift(1980),

- カールシュタイン Carlstein(1981b)を参照のこと。
- 8) もし、二つの場を移動するのに必要とされる時間の長さが二つの活動の終了と開始を隔てている期間を超過してしまうなら、もう一つのプロジェクトは支配的プロジェクトの参加者にとって手の届かないものになってしまうだろう。脚注7の参考文献や、レントープ Lenntorp(1976)やモルテンソン Mårtensson(1979)に含まれている図表を参照のこと。
  - 9) 多極的に立地する組織の重要性が高まり、資本の国際化が進み、産業の投入産出連鎖がますます複雑になったこの数十年のうちに、このことははるかにそう言えるようになってきた。
  - 10) そのような立地決定は明示的だったり暗黙のものだったりするだろう。明示的な立地決定は、印刷物において普通は強調されている土地利用や施設立地を指し示すものである。暗黙の立地決定は、実業組織や政府組織が決意して財やサービスを購入したり、契約や下請け契約を落札したり、資本を多方面に割り当てたりするときにはいつでも発生する。そのような決定は通常それに携わる人々からは立地的なものだとみなされていないけれども、それはいくつかの場所を他の場所より必要としているという理由から立地的なものなのである。
  - 11) この筋の理由づけにまつわる関連したそしてしばしばもっと詳細な議論については、マッシー Massey(1978)、ウォーカーとストーパー Walker and Storper(1981)、ストーパー Storper(1981, 1982)、クラーク Clark(1981)を参照のこと。
  - 12) 活動と集団系 population systems の調整にまつわる関連する批評については、ヘーゲルstrand Hägerstrand(1972, 1978)、エレゴルドとヘーゲルstrand Ellegård, Hägerstrand and Lenntorp(1977)、プレッド Pred(1977)を参照のこと。
  - 13) 人類学者のアルフレッド・クローバー Alfred Kroeber とロバート・ローウィ Robert Lowie によって開拓され、文化地理学のサウアー Sauer 学派の人々によって採用された、文化の超有機体的な見方に対する洞察に富んだ批判については、ダンカン Duncan(1980)を参照のこと。
  - 14) これは、タルコット・パーソンズ Talcott Parsons や何人かのマルクス主義者などの「機能主義的な」著作に対してしばしば向けられた批判を踏まえている。とりわけ、ギデンズ Giddens(1981, 18)は次のように論じてきた。「それぞれの社会でもっとも深く堆積した制度的特徴 [そしてその構成要素たるおのおのの場所] ですら、生じたり、持続したり、消滅したりすることはない。なぜなら、その社会が求めるからそれらがそうなるからである。それらは、全ての事例において直接分析されなければならない具体的な諸条件の結果として、歴史的に生起するのであり、同様のことがその持続、あるいはその分解について言えるのである」。
  - 15) 残余の部分として姿を現した支配的な文化の諸形態については、ウィリアムズ Williams(1977, 121-27)を参照のこと。
  - 16) 時間資源の解放は、プロジェクトそのものを短縮するか中断することによってばかりでなく、プロジェクト間の移動を縮減するか除去することによっても可能になる。
  - 17) このことは、もちろん、ウィトゲンシュタイン Wittgenstein が頻繁に用いたことわざ(1922, 段落 5.6)、「私の言語の境界は世界の境界を意味している」に基づくひとつの洒落である。それは、「言語は何はさておき公共のものであり、私たちが連れ立ってすることにしっかりと根ざしている」という、ウィトゲンシュタインの後期著作に見られる主要テーマのひとつである(Hacking 1982, 42)。
  - 18) 社会(対面的)統合とシステム統合の融合が生じるローカルな特色を与えられた諸状況と、社会統合とシステム統合の分裂が生じるそのような諸状況とのあいだに、ギデンズ Giddens(1981)が見定めた区別を参照のこと。前者の諸状況は「高度な現前利用可能性」と「低度な時間-空間の遠隔化」によって特徴づけられるが、後者はその否定である。
  - 19) このようにして、外部-内部そして生涯パス-日々のパスとの弁証法は、非マルクス主義者もマルクス主義者と同様にしばしば引き合いに出す次の引用句に対して、時間-空間の種別性を付与する。すなわち、「人間は自分自身の歴史をつくる、しかしそれは自分がまさに望んだようにはなく、自分自身で選択した状況の下においても、むしろ過去から直接遭遇し、与えられ、伝達されてきた状況の下においてである」(Karl Marx, *The 18th Brumaire of Louis Bonaparte*)。
  - 20) セーヴ Sève(1975, 1978)によって提起されたパーソナリティ発達のコンテクスト理論・唯物論的理論を参照のこと。また、スリフト Thrift(1983)やシェイムズ Shames(1981)によるセーヴの批評と但し書きについて注目のこと。
  - 21) サミュエルズ Samuels(1979)における景観の「原作者 authorship」にまつわる批評を参照のこと。社会的コンテクストに対するある種の承認はあるけれども、サミュエルズは事実上制度のない世界を提起する。その世界では、「血筋、人種、財産、教育、地位がもっとも社会的に制限された状況にある場合でさえ、個々人は自分たち自身の景観を形づくり創造しようとしてやむことなく現れる」(p. 79)。また、ダンカン Duncan(1980)における地理的行為主体としての「人間」にまつわる発現にも注目のこと。
  - 22) この不透明性は、ある部分で、ほとんどの物体や自然資源が非ローカルな起源を有しているために生じる。それはまた、ある部分で、人々が自ら代価を払ったり払わなかったりした労働が、通常すでに加工処理された財(さもなくば自然界の直接的修正というより間接的修正)と明らかに人間に起源を有する科学技術とをともに含んで

いるために生じる。多くのマルクス主義者が主張するように、それはまた、一度財がその貨幣による交換価値の点から商品化され互いからの偏差を与えられると、財に備わる本質的に「自然な性質」が「かき消される」ために生じる(Sayer 1979 参照)。

- 23) 関連するが幾分異なる視点については、現代的実存に浸透している創造と破壊の弁証法にまつわるバーマン Berman(1982)の議論を参照のこと。
- 24) Giddens(1981, 37, 33)。ギデنزの最新の理論的著作に見られる存在、不在、差異という概念の利用は、ハイデッガー Heidegger とデリダ Derrida に深く依拠している。しかしながら、彼はいくつかの点でハイデッガーに異議を唱える。そのなかには、おそらくハイデッガーは存在の焦点として身体に十分な強調を与えなかったであろうという点が含まれている。注目すべきことに、こうした諸概念を使用するに際して、ギデنزは自然環境もしくは人間によって作られた物体についてほとんど明白に説明することがない。
- 25) 社会理論や社会哲学の文献には、権力をひとつの社会的関係として解釈するうえで、しばしば方向感覚を失わせる茂みが含まれている(Lukes 1978; Wrong 1979)。近年の概念化の試みは、ラッセル Russell(1938)の影響を多分に受けて、「権力とは、ある人たちがもっている他者に対して意図され予見されるもろもろの効果を生み出す能力である」と強調してきた(Wrong 1979, 2)。さもなくば、「社会的相互作用において[生じる]自律と依存の関係」(Giddens 1979, 91-3)として、それは、ある人たちがもっている他者に対して他の方法ではないであろうやり方で行為させる能力である。マックス・ヴェーバー Max Weber によれば、多くの人たちがこの能力を、不利益、処罰、もしくは身体的・心理的性質の剥奪を実際に課すか、あるいは課すと脅して真に受けさせる能力と同じものと考えてきた。したがって、権力諸関係は、力や威圧を使う能力、制裁を実行する能力、物質的・性的・その他の報酬を与えずにおく(あるいは贈呈する)こと、そして支配と結びつけられてきた。結果的に、権力諸関係はまた、実際のあるいは潜在的な抵抗、役割規定の異議申し立てと変換、権力を保持する者たちと権力に服従する者たちとのあいだに存在する目的や利益関心の葛藤とも同じものと考えられてきた。別の人たちは、説得の実施あるいはもっと芸の細かい巧妙な工作の駆使の点から、権力諸関係を描き出すことを選んだ。しかし、また別の人たちは「権威」を、すなわち指令を公布することで従順な振る舞いを手に入れようとする権力の形態を強調してきた。とりわけ、権威は、しばしば情動や正当化によって偽造される一つの紐帯として、すなわち社会的強者と社会的弱者、ハイ・ステータスとロー・ステータス、資源統制者と資源欠乏者、ある種の資質をもっている者と認められる者とそのような資質を獲得し得ないと認める者のあいだの紐帯として、描き出されてきた(Sennett

1980)。今度は、政治的権力が威圧的あるいは合法的な権威の形態をもつものとして一般に描き出される。そして、権威の他の現れと同じように、それは概念のうえで、規律訓練、統制、認識される規範・規則・制約、制限、従属、敬服、服従、抑圧、恐怖と結びついている。

- 26) 時間と空間における他者の振る舞いに対する幾分細部にわたるあからさまな管理や監督としての規律訓練についてはフーコー Foucault(1979)を、また「社会的収監」の現代的諸形態についてはオルソン Olsson(1982)を参照のこと。
- 27) 権力諸関係もまた、合意の出現もしくは永久的な分裂によって変形されるであろう。そのいずれもが対立抗争か矛盾と組み合わせられて発生するだろう。
- 28) コジーク Kosik(1976)、バーガーとluckmann Berger and Luckmann(1967)を参照のこと。ギデنز Giddens(1981, 65)によれば、当然視されている諸規範に対する打算的で巧妙な態度が時々ある種の条件の下で姿を見せるため、「当然視されるものが正当なものとして受け入れられるものと避けがたく同じになるとは限らない」。
- 29) ギデنز Giddens(1981)は、一方で「時間-空間の遠隔化」について、他方で社会統合とシステム統合について、関連するそれぞれの議論を展開する際に、彼は部族社会から先進資本主義社会につながるひとつの連続体に沿ってそれぞれの条件を識別する(注 18 参照)。また、ルフェーブル Lefebvre(1971)がおこなった観察と比較対照のこと。
- 30) スリフト Thrift(1980, 1983)による提案を参照のこと。
- 31) 例えば、ベルトール Bertaux(1981)を参照のこと。また、サルトル Sartre のフローベール Flaubert についての記念碑的著作に注目のこと(Sartre 1981; Barnes 1981)。
- 32) ハレヴェンとランゲンバッハ Hareven and Langenbach(1978)、ヘリアス Hélias(1978)の手短な再解釈のために適切な事例として、プレッド Pred(1983)を参照のこと。

## 文献

- Abrams, Philip. 1983. *Historical sociology*. Ithaca: Cornell University Press.
- Barnes, Hazel E. 1981. *Sartre & Flaubert*. Chicago: University of Chicago Press.
- Barthes, Roland. 1972. *Mythologies*. New York: Hill and Wang.
- Berdoulay, Vincent. 1978. The Vidal-Durkheim debate. In *Humanistic geography: prospects and problems*, ed. David Ley and Marwyn Samuels, pp.77-90. Chicago: Maaroufa.
- Berger, Peter L., and Luckmann, Thomas. 1967. *The*

- social construction of reality: a treatise in the sociology of knowledge*. Garden City: Anchor Books.
- Berman, Marshall. 1982. *All that is solid melts into air: the experience of modernity*. New York: Simon and Schuster.
- Bernstein, Basil. 1975. *Class, codes and control: theoretical studies towards a sociology of language*. New York: Schocken Books.
- Benaux, Daniel, ed. 1981. *Biography and Society: the life history approach in the Social sciences*. Beverly Hills: Sage.
- Bhaskar, Roy. 1978. On the possibility of social scientific knowledge and the limits of naturalism. *Journal for the Theory of Social Behavior* 8: 1-28.
- . 1979. *The possibility of naturalism: a philosophical critique of the contemporary human sciences*. Brighton: Harvester Press.
- Bourdieu, Pierre. 1977. *Outline of a theory of practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1979. *La distinction, critique sociale du judgement*. Paris: Minuit.
- Bourdieu, Pierre, and Passeron, Jean-Claude. 1977. *Reproduction in education, society and culture*. Beverly Hills: Sage.
- Burke, Kenneth. 1969. *A grammar of motives*. Berkeley: University of California Press.
- Buttimer, Anne. 1971. *Society and milieu in the French geographic tradition*. Association of American Geographers Monograph Series No. 6. Chicago: Rand McNally.
- . 1978. Charisma and context: the challenge of la geographie humaine. In *Humanistic geography: prospects and problems*, ed. David Ley and Marwyn Samuels, pp. 58-76. Chicago: Maaroufe.
- Carlstein, Tommy. 1981a. The sociology of structuration in time and space: A time-geographic assessment of Giddens's theory. *Svensk Geografisk Årsbok* 57: 41-57.
- . 1981b. *Time resources, society and ecology: on the capacity for human interaction in time and space, vol. 1, Preindustrial societies*. London: Allen and Unwin.
- Christopherson, Susan. 1982. *Family and class in the new industrial city*. Ph.D. dissertation. Department of Geography, University of California, Berkeley.
- Clark, Gordon L. 1981. The employment relation and spatial division of labor: a hypothesis. *Annals of the Association of American Geographers* 71: 412-24.
- Cooper, L. N. 1980. Source and limits of human intellect. *Daedalus* Spring: 1-17.
- Cosgrove, D. 1978. Place, landscape, and the dialectics of cultural geography. *Canadian Geographer* 22: 66-72.
- Coward, Rosalind, and Ellis, John. 1977. *Language and materialism: developments in semiology and the theory of the subject*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Duncan, James S. 1980. The superorganic in American cultural geography. *Annals of the Association of American Geographers* 70: 181-98.
- Eliot, T. S. 1942. *Little Gidding*. London: Faber and Faber.
- Ellegård, Kajsa, Hägerstrand, Torsten, and Lenntorp, Bo. 1977. Activity organization and the generation of daily travel: two future alternatives. *Economic Geography* 53: 126-52.
- Elster, Jan. 1978. *Logic and society: contradictions and possible worlds*. Chichester: John Wiley.
- Erikson, Erik H. 1975. *Life history and the historical moment*. New York: W. W. Norton.
- Foucault, Michel. 1970. *The order of things: an archeology of the human sciences*. New York: Random House.
- . 1972. *The archeology of knowledge and the discourse on language*. New York: Random House.
- . 1979. *Discipline and punish: The birth of the prison*. Harmondsworth: Penguin Books.
- Geertz, Clifford. 1964. Ideology as a cultural system. In *Ideology and discontent*, ed. David Apter, pp. 47-76. New York: Free Press.
- Giddens, Anthony. 1973. *The class structure of the advanced societies*. London: Hutchinson.
- . 1976. *New rules of sociological method*. London: Hutchinson.
- . 1979. *Central problems in social theory: action, structure and contradiction in social analysis*. Berkeley: University of California Press.
- . 1981. *A contemporary critique of historical materialism, vol. 1, Power, property and the state*. Berkeley: University of California Press.
- Gouldner, Alvin W. 1976. *The dialectic of ideology and technology: the origins, grammar, and future of ideology*. New York: Seabury Press.
- Gregory, Derek. 1981. Human agency and human geography. *Transactions of the Institute of British Geographers New Series* 6: 1-18.
- . 1982. Solid geometry: notes on the recovery of spatial structure. In *A search for common ground*, ed. Peter Gould and Gunnar Olsson, pp. 187-219. London: Pion.
- Hacking, Ian. 1982. Wittgenstein the psychologist. *New York Review of Books* 29: 42-44.

- Hägerstrand, Torsten. 1970. What about people in regional science? *Papers of the Regional Science Association* 24: 7-21.
- . 1972. Tätortsgupper som regionsamhällen: Tillgången till förvärvsarbete utanför de större städerna. In ERU (Expertgruppen for regional utredningsverksamhet), *Regioner att leva i*, pp. 141-73. Stockholm: Allmänna förlaget.
- . 1974a. Ecology under one perspective. In *Ecological problems of the circumpolar area*, ed. E. Bylund, H. Linderholm, and O. Rune, pp. 271-76. Luleå: Norrbottens Museum.
- . 1974b. On socio-technical ecology and the study of innovations. *Ethnologica Europaea* 7: 17-34.
- . 1976a. Geography and the study of interaction between nature and society. *Geoforum* 7: 329-34.
- . 1976b. Here and now as the waist of an hourglass. Lund: unpublished manuscript.
- . 1977. On the survival of the cultural heritage. *Ethnologica Scandinavica* 1: 7-12.
- . 1978. Survival and arena: on the life history of individuals in relation to their geographical environment. In *Timing space and spacing time, vol. 2, Human activity and time-geography*, ed. Tommy Carlstein, Don Parkes, and Nigel Thrift, pp.122-45. London: Edward Arnold.
- . 1982. Diorama, path and project. *Tijdschrift voor Economische en Sociale Geografie* 73: 323-39.
- Hareven, Tamara, and Langenbach, Randolph. 1978. *Amoskeag: Life and work in an American factory city*. New York: Pantheon Books.
- Harré, Rom. 1978. Architectonic man: on the structuring of lived experience. In *Structure, consciousness, and history*, ed. Harvey Brown and Stanford M. Lyman, pp. 139-72. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hélias, Pierre-Jakéz, 1978. *The horse of pride: life in a Breton village*. New Haven: Yale University Press.
- Hudson, Roy. 1979. Space, place, and placelessness: some questions concerning methodology. *Progress in Human Geography*, 3: 169-73.
- Kosik, Karel. 1976. *Dialectics of the concrete*. Boston Studies in the Philosophy of Science 52.
- Lacan, Jacques. 1968. *The language of the self: the function of language in psychoanalysis*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Layder, Derek. 1981. *Structure, interaction and social theory*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Lefebvre, Henri. 1971. *Everyday life in the modern world*. New York: Harper & Row.
- Lenntorp, Bo. 1976. *Paths in space-time environments: a time-geographic study of movement possibilities of individuals*. Lund Studies in Geography, Series B, No. 44.
- Ley, David. 1977. Social geography and the taken-for-granted world. *Transactions of the Institute of British Geographers New Series* 2: 498-512.
- . 1981. Cultural/ humanistic geography. *Progress in Human Geography* 5: 249-57.
- Lowenthal, David. 1975. Past time, present time: landscape and memory. *Geographical Review* 65: 1-36.
- Lukes, Steven. 1978. Power and authority. In *A history of sociological analysis*, ed. Tom Bottomore and Robert Nisbet, pp. 633-76. New York: Basic Books.
- Mårtensson, Solveig. 1979. *On the formation of biographies in space-time environments*. Lund Studies in Geography, Series B, No. 47.
- Massey, Doreen. 1978. In what sense a regional problem? *Regional Studies* 13: 233-43.
- Miller, Roger. 1983. The Hoover in the garden: domestic technology and changing roles for women in the early twentieth-century suburb. *Society and Space* 1: 73-87.
- Olsson, Gunnar. 1980a. *Birds in egg/ eggs in bird*. London: Pion.
- . 1980b. Ord om tankar/ tankar om ord. *Svensk Geografisk Årsbok* 56: 89-94.
- . 1982. ---/ ---. In *A search for common ground*, ed. Peter Gould and Gunnar Olsson, pp. 223-31. London: Pion.
- Parkes, Don, and Thrift, Nigel. 1980. *Times, spaces and places: a chronogeographic perspective*. New York: John Wiley.
- Pred, Allan. 1973. Urbanisation, domestic planning problems and Swedish geographic research. *Progress in Geography* 5: 1-76.
- . 1977. *City-systems in advanced economies: past growth, present processes and future development options*. London: Hutchinson.
- . 1978. The impact of technological and institutional innovations on life content: some time-geographic observations. *Geographical Analysis* 10: 345-72.
- . 1981a. Of paths and projects: individual behavior and its societal context. In *Behavioral geography revisited*, ed. Reginald Golledge and Kevin Cox, pp. 231-55. London: Methuen.
- . 1981b. Power, everyday practice and the discipline of human geography. In *Space and time in geography: essays dedicated to Torsten Hägerstrand*, ed. Allan Pred, pp. 30-35. Lund: C. W. K. Gleerup.
- . 1981c. Production, family, and free-time projects: a

- time-geographic perspective on the individual and societal change in nineteenth-century U.S. cities. *Journal of Historical Geography* 7: 3-36.
- . 1981d. Social reproduction and the time-geography of everyday life. *Geografiska Annaler* 63B: 5-22.
- . 1983. Structuration and place: on the becoming of sense of place and structure of feeling. *Journal for the Theory of Social Behavior* 13: 45-68.
- . 1984. The social becomes the spatial, the spatial becomes the social --enclosures, social change and the becoming of places in the Swedish province of Skåne. In *Social relations and spatial structures*, ed. Derek Gregory and John Urry. London: Macmillan. In Press.
- . 1985. *Becoming places, practice and structure: the emergence and aftermath of enclosures in the plains villages of southwestern Skåne, 1750-1850*. Cambridge: Cambridge University Press. In press.
- Prigogine, J. 1980. *From being to becoming: time and complexity in the physical sciences*. San Francisco: Freeman.
- Russell, Benrand. 1938. *Power: a new social analysis*. London: George Allen and Unwin.
- Sahlins, Marshall. 1974. *Stone-Age Economics*. London: Tavistock.
- Samuels, Marwyn S. 1979. The biography of landscape: cause and culpability. In *The interpretation of ordinary landscapes*, ed. D. W. Meinig, pp. 51-87. New York: Oxford University Press.
- Sartre, Jean-Paul. 1981. *The family idiot: Gustave Flaubert, I 1821-1857*. Chicago: University of Chicago Press.
- Sayer, Andrew. 1979. Epistemology and conceptions of people and nature in geography. *Geoforum* 10: 19-44.
- Sennett, Richard. 1980. *Authority*. New York: Alfred A. Knopf.
- Sève, Lucien. 1975. *Marxism and the theory of human personality*. London: Lawrence and Wishart.
- . 1978. *Man in Marxist theory and the psychology of personality*. Brighton: Harvester Press.
- Shames, C. 1981. The scientific humanism of Lucien Sève. *Science and Society* 45: 1-23.
- Shotter, John. 1983. "Duality of structure" and "intentionality" in an ecological psychology: towards a science of individuality. *Journal for the Theory of Social Behavior* 13: 19-43.
- Soja, Edward W. 1980. The socio-spatial dialectic. *Annals of the Association of American Geographers* 70: 207-25.
- Storper, Michael. 1981. Toward a structural theory of industrial location. In *Industrial location and regional systems*, ed. J. Rees, G. Hewings, and H. Stafford, pp. 17-40. New York: Bergin.
- . 1982. *The spatial division of labor: technology, the labor process, and the location of industries*. Ph.D. dissertation. Department of Geography, University of California, Berkeley.
- Thrift, Nigel. 1979. *The limits to knowledge in social theory: towards a theory of practice*. Canberra: Department of Human Geography, Australian National University, mimeographed.
- . 1998. Local history: a review essay. *Environment and Planning A* 12: 855-62.
- . 1983. On the determination of social action in space and time. *Society and Space* 1: 23-57.
- Thrift, Nigel, and Pred, Allan. 1981. Time-geography: a new beginning. *Progress in Human Geography* 5: 277-86.
- Touraine, Alain. 1977. *The self-production of society*. Chicago: University of Chicago Press.
- Urry, John. 1981. Localities, regions, and social class. *International Journal of Urban and Regional Research* 5: 455-74.
- Walker, Richard, and Storper, Michael. 1981. Capital and industrial location. *Progress in Human Geography* 5: 473-509.
- Wever, Max. 1968. *Economy and society, 3 vols*. New York: Bedminster Press.
- Williams, Raymond. 1977. *Marxism and literature*. Oxford: Oxford University Press.
- Wittgenstein, Ludwig. 1922. *Tractatus Logico-philosophicus*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Wrong, Dennis H. 1979. *Power: its forms, bases and uses*. New York: Harper & Row.
- Young, J. Z. 1978. *Programs of the brain*. Oxford: Oxford University Press.